

報告 REPORT

令和6年度 北海道医師会賞・北海道知事賞 受賞者業績紹介

本誌9月（第1272）号にてご報告いたしましたとおり、10月5日（土）午後3時より、札幌グランドホテルにおいて、北海道医師会賞・北海道知事賞贈呈式が挙行されます。

ここに受賞された方々のご業績を紹介いたしますとともに、受賞者各位の一層のご活躍を祈念いたします。

—学術部—

令和6年度 北海道医師会賞・北海道知事賞受賞者

| 医師会名 | 職 氏 名 | 研究（業績）題名 |
|--------|--|---|
| 札幌市 | 医療法人菊郷会 愛育病院 院長 もり盛 あきお生 | 造血器疾患におけるコロナワクチンの有効性に関する研究 |
| 美唄市 | 市立美唄病院小児科 まつ松 うらぶのぶお夫 | 北海道内で発症した1型糖尿病児の長期疫学的研究—発症率とその長期予後 |
| 北海道大学 | 北海道大学大学院医学研究院 神経内科学教室 教授 やべいちろう 矢部 一郎 | 脳神経内科領域における臨床遺伝学的研究 |
| | 北海道大学大学院医学研究院 消化器外科学教室 I 教授 たけとみあきのぶ 武 富 紹 信 | D G K を 標 的 と し た 肝 癌 に 対 す る 新 規 治 療 法 の 開 発 研 究 |
| 札幌医科大学 | 札幌医科大学 医学部 免疫・リウマチ内科学 教授 たかやしひろき 高 橋 裕 樹 | I g G 4 関 連 疾 患 の 疾 患 概 念 の 成 立 、 お よ び 病 態 解 明 ・ 治 療 に 関 す る 研 究 |
| 旭川医科大学 | 旭川医科大学内科学講座 消化器内科学分野 教授 ふじやみきひろ 藤 谷 幹 浩 | 有益微生物由来の生理活性分子を用いた新規治療薬開発 |

北海道医師会賞・北海道知事賞

造血器疾患における コロナワクチンの 有効性に関する研究



医療法人菊郷会 愛育病院

もり 盛 院長
あき 暁 先生

盛暁生先生は、1993年に北海道大学医学部を卒業し、北大・第三内科入局後は血液内科の臨床、研究、教育に従事してきた。白血病の基礎研究で学位を取得した後、カリフォルニア大学ロサンゼルス校でがん研究に従事した。2006年から現在の愛育病院に着任し、2023年からは院長に就任している。

2019年12月に始まった新型コロナパンデミックに対してmRNAワクチンが開発され、臨床試験では95%の発症予防効果を認めた。2021年2月から日本でも投与が開始されたが、造血器がん患者では効果が劣ることが危惧された。そこで、愛育病院では

2021年早々にコロナワクチン評価プロジェクトを立ち上げ、血液疾患でのワクチン効果に関する研究を開始した。その後リンパ系血液がんではワクチン効果が著しく劣ると報告された。盛先生の特筆すべき業績は、骨髄系血液がんではワクチン効果は健常人とほぼ同程度であることを、世界で初めて英国血液学会誌で報告したことである。更に、骨髄系血液がんでのブースター効果、ワクチン接種後の免疫性血小板減少症の発症頻度や有効性に関する論文を筆頭著者として、リンパ系血液がんなどに関しては共著者として、合わせて8本の論文を海外の医学雑誌で報告した。これらの知見は、血液疾患患者に非常に有益な情報であり、いつ起こるかもしれない新興パンデミックの際には重要な基礎的データとなる。現在も、造血器疾患に関する臨床研究を更に発展させており、北海道の血液内科の臨床、研究両面での発展に尽力している。

北海道内で発症した 1型糖尿病児の長期 疫学的研究－発症率 とその長期予後



市立美唄病院小児科

まつ 浦 のぶ お 夫

松浦信夫先生は、昭和38年北大医学部を卒業後、在日米軍立川空軍病院で医学実施修練を修了し、北大小児科大学院に進学、大学院修了後、モントルオール市Lady Davis研究所に留学した。大学院及び留学中は、糖・脂質代謝の研究に従事していた。帰国後、昭和49年北大小児科助手、その後講師、助教授に就任し、主に内分泌代謝及び糖尿病の診療、研究に携わった。昭和49年、北海道で糖尿病小児のサマーキャンプを開催し、現在も継続している。この間、1型糖尿病児の発症率を報告した。平成3年北大を退職し、斗南病院に就職、その後平成5年4

月に、北里大学小児科主任教授に就任した。北里大学在任中には、厚生労働科学研究小児糖尿病研究班主任研究者を3期、9年間勤め、全国の多くの若い糖尿病研究者を班員として迎え、小児糖尿病研究の裾野を広げた。更に、平成6年、全国の研究者を集めた「小児インスリン治療研究会」を立ち上げ、発症率の少ない我が国の実態を世界に向けて発信している。また、NIH研究費によるDERI研究、The Hividore Study Group等の日本代表者として参画し、国際共同研究を進めた。北里大学退職後は、聖徳大学児童学部教授として、幼児教育に携わり、平成29年、北海道に戻り、市立美唄病院小児科の嘱託医として、小児科診療に関わると共に、北大在職中に登録した、北海道内発症小児1型糖尿病児521例の長期予後調査を開始した。この度、粗死亡率、標準死亡比（SMR）の改善を明らかにし、英文誌に報告した。

脳神経内科領域における臨床遺伝学的研究



北海道大学大学院医学研究院神経内科学教室

教授 矢部 一郎

矢部一郎教授は、脳神経内科領域において分子遺伝学的手法を用いて新たな知見を継続して見いだし成果をあげている。代表的業績として、世界で初めてbassoon遺伝子変異に起因するタウオパチーを発見したことや、第19番染色体長腕に連鎖する脊髄小脳失調症を発見し脊髄小脳失調症14型と命名する一連の研究に大きく貢献し、その原因遺伝子を発見したこと、遺伝性運動失調症の臨床神経学的視点に基づいた研究等が挙げられる。いずれも世界初または本邦初となる研究成果であり、わが国の脳神経内科領域における臨床遺伝学の発展に貢献した。これら

の研究業績は診療現場から見いだされた研究業績であり、アカデミアに在籍する臨床医に求められる「科学的な視点を持って日常診療を実践し、臨床から生まれた疑問やアイデアを基に臨床・基礎研究を行い、有益な成果を臨床に還元する臨床医科学者」を実践したものである。加えて、北海道大学における認知症の研究と診療にも貢献している。北海道大学病院軽度認知障害センター部長として地域連携病院とも適切に連携して認知症診療を進捗させているのみならず、APOE遺伝学的検査やポリジェニックリスクスコアを含めたゲノム医療を実装させるべく現在尽力している。さらには、持続可能な共生社会の実現に向けた世界トップレベルの認知症関連研究の推進と社会実装を目指して、北海道大学に設置された認知症研究拠点の拠点代表も務めている。

DGKを標的とした肝臓に対する新規治療法の開発研究



北海道大学大学院医学研究院消化器外科学教室 I

教授 武 富 紹 信

武富紹信教授は、平成2年に九州大学を卒業後、同第二外科（現消化器・総合外科）に入局し、平成23年に北海道大学消化器外科I教授として赴任後も一環として肝細胞癌に対する肝切除や肝移植医療などの肝臓外科治療を推進する傍ら、分子標的薬や免疫チェックポイント阻害剤と外科治療を融合した集学的治療の発展に注目し研究を進めてきた。

武富教授は消化器癌の発生・進展におけるDGK α / ζ の機能に注目した研究を展開し、DGK α が肝細胞癌においてMAPキナーゼ経路を活性化すること、肝細胞癌の増殖や生存などを調節する上流因子であることを明らかにし、またDGK α 阻害剤が

肝細胞癌を含めた各種癌細胞株の増殖を抑制すること、およびHCCモデルマウスにおいてDGK α 阻害剤が①直接的な癌細胞増殖抑制効果と②T細胞活性化を介した抗腫瘍免疫賦活効果の二方向性抗腫瘍効果を示すとともに、抗PD-L1抗体との併用によって相乗的に抗腫瘍効果を示すことを報告した。さらに、DGK α 阻害によるbifunctionalな作用に加え、DGK ζ 阻害による抗腫瘍免疫の増強との相加・相乗的な効果が期待され今までにない抗腫瘍効果が期待し、将来的な臨床応用を見据え研究を継続している。

学会活動では、日本外科学会理事長、日本癌治療学会理事、日本肝胆膵外科学会理事、日本消化器癌発生学会理事、日本腹部救急医学会理事などを務め、若手医師減少、働き方改革、専門医制度やダイバーシティ推進など外科を取り巻く様々な課題に取り組むとともに、学内では北海道大学病院病院長補佐（経営、再開発、施設担当）を務め管理運営にも貢献している。

IgG4関連疾患の疾患 概念の成立、および 病態解明・治療に 関する研究



札幌医科大学医学部免疫・リウマチ内科学

教授 高橋 裕樹

高橋裕樹教授は、1985年に札幌医科大学医学部を卒業後、同内科学第一講座に入局し、消化器・免疫疾患に関する診療・研究・教育に従事してきた。2017年には北海道初の免疫・リウマチ内科教室の初代教授に就任し、リウマチ性疾患の臨床研究を推進している。特に以前はシェーグレン症候群の亜型として扱われ、その本質が看過されていたIgG4関連疾患に1990年代から着目し、21世紀初頭から学会や論文でその特異性を報告してきたことは、今日、IgG4関連疾患が独立した全身性炎症性疾患として世界的に認知される嚆矢になったものといえる。本

邦では2009年にIgG4関連疾患に関する厚生労働省研究班がスタートしたが、そのメンバーとして活動を開始・継続しており、IgG4関連疾患の包括診断基準の作成にも関与し、引き続き病態解明や新規治療法の開発に参画している。札幌医科大学附属病院において、消化器内科、耳鼻咽喉科などと協力し、積極的にIgG4関連疾患の診療を行い、世界有数の診療実績を呈し、本邦のレジストリーにも多大な貢献を行っている。一方、IgG4関連疾患の重要な鑑別疾患であり、北海道では全国に先駆けて難病認定を受けていたシェーグレン症候群の臨床研究にも注力し、2021年からは日本シェーグレン症候群学会の理事長としても活動中である。また、これら免疫異常を基盤とした慢性疾患は、病因・病態の解明が進み、パラダイムシフトと呼称される治療戦略の変革が進んでおり、地域においても標準的な診療を受けられるよう、リウマチ専門医の育成に関しても尽力している。

有益微生物由来の生理 活性分子を用いた新規 治療薬開発



旭川医科大学内科学講座消化器内科学分野

教授 藤谷 幹浩

藤谷幹浩教授は、平成元年に旭川医科大学を卒業後、同内科学講座第三（現内科学講座消化器内科学分野）に入局し、米国シカゴ大学への留学を経て、令和2年から同内科学講座の教授に就任した。診療に従事する中で、難治性炎症性腸疾患の病態解明に取り組み、再燃予防には腸管粘膜の完全修復（粘膜治癒）を達成する必要があることを見出し（*Gastrointest Endosc*, 2002）、新たな治療ゴールとして国際的に認知されるようになった（*Gastroenterology*, 2008）。並行して、有益微生物由来の生理活性分子の同定技術を確立し（*Cell Host Microbe*, 2007）、菌由来腸管バリア増強分子で

ある長鎖ポリリン酸の同定に成功した（*Plos One*, 2011）（特許第5660508号、他）。引き続き、この分子を用いた世界初の腸管粘膜治癒誘導薬の開発へ向けて医師主導臨床試験を実施し、難治性潰瘍性大腸炎患者に対する有効性と安全性を証明した（*Clin Pharmacol Ther*, 2020）。現在、薬事承認へ向けて次相の治験を準備している。また、この創薬技術を用いて複数の抗腫瘍分子の同定にも成功した（*Nat Commun*, 2016、他）（特許第6830255号、他）。その他にmicroRNAやRNA結合蛋白に着目した新規治療標的の開発も進めており（*Oncogene*, 2014、他）、一連の成果は、産学連携事業の創出やバイオベンチャーの起業を通じて、社会実装へと向かっている。

また、道東・道北エリアを中心に炎症性腸疾患などの疾患コホートを構築し、地域の診療支援や若手育成、リモート診療の普及に努めている。学内では副学長（産学連携担当）や副病院長として大学や病院の運営に貢献しており、研究、診療、教育および社会貢献における今後の活躍が期待される。